
Diamond Piece

たまゆら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D i a m o n d P i e c e

【Nコード】

N 5 8 9 2 B

【作者名】

たまゆら

【あらすじ】

暗い闇の中だけが私の全てだった…幼い頃、母親に殺されかけた所を施設に拾われ、私は新しい命を得た。―残忍な殺人鬼として…

プロローグ　く私く

夢を見た

幼い頃の夢だった

「―ねえ…どこにいくの？」

暗い道を歩きながら、問い掛けに応じない母に、私は何度もこう聞いてみるが、全く反応しようとはしてくれなかった

家から随分離れた山みたいな所にいるらしく、空気は湿っていて、足元は不安定で歩きづらい

少し開いた所に出ると、眼前に崖が広がり、ますますこんな所に何の用かわからなくなった

「…うわぁ…高い…」

崖下を覗きこんで、その見た事のないような高さにあっけにとられていると、急に体が宙に浮いた

「…え…？」

その瞬間、状況を理解したが遅かった

軽い私の体はいとも簡単に投げ捨てられ、そのまま闇の中へと落ちて行った

『何で―？』

落ちて行く中で、そんなことが頭に浮かんでくる

『嫌だ―嫌だイヤだいやだ―！』

溢れる涙が空に昇っていくのを見ながら、ゆっくりと目を閉じた

死にたくない…

―これが、私の唯一の記憶…

目を覚ますと、暗闇が私を迎えた
部屋には窓がなく、ベッド一つだけがあり、空気循環器の機械音だけが低く唸っていた

ここが、今の私の世界。私の全て
果てしない闇と単調な音の世界で私は身動き一つせず、ただただ時間が過ぎることだけを感じていた

シュン――

不意に、ドアの開く電子音が鳴り、人工的な光が部屋の中に飛び込んできた

「――夏夜、仕事だ。出ろ」男の声が部屋に響き、それを聞いて私はベッドから下りて出口へ向かった

「今回のターゲットだ」

「……」

そう言って渡された写真には、豪華な服を着た男の姿があった
「……わかりました……すぐ行きます」

そう言ってその施設を出ると、すぐ車があり、それに乗り込む

出発してから程なくして、目的地である場所についたらしい
車は止まり、私はすぐ下りて数人の部隊を連れて走っていった
かなり大きい家の近く、入ってくる車を待つ

やがて二本のライトの明かりが閃くと同時に、部隊を動かした
車のタイヤを打ち抜き、足を止めた後は、私の仕事だ

後部座席に走り、驚愕の表情を浮かべているターゲットの顔を確認
すると、意識を腕に集中する

「……ッ！」

少しの痛みと共に腕の形は変質し、鋼と化したそれでドアを突き破りながらターゲットを引きずり出す

「…あ…ああ…」

恐怖に怯える男の胸に、変質させたもう一方の腕で貫いた
断末魔の悲鳴を上げ、男は絶命した

「…」

周りを見ると、連れてきた部隊が車に乗っていた全員の殲滅に成功していた

「…以上で作戦を終了します…退散しましょう」

咄くと同時に迎えの車が到着した

乗り込んで走っていく後ろで、車が爆散する音が聞こえた

帰りの車のなか、浴びた返り血を見て呆然としていた

私は人殺し―でもそれは仕様がなかったこと

本当に…そう？

「私は…」

咄きかけた所で、言葉を飲み込む

窓から見える景色は凄く綺麗で、思わず涙が出そうだった
こうして、私は毎日を生きている

第一話　（発作と記憶）

「…く…あう…」

胸が苦しい。体が熱い。喉が乾いて破れそう…

再びこの闇の中に戻った私は、この苦痛に耐えていた私の体は、もはや人間とはいえないモノへと変わっている『人間』という器では、この力についていけないのだ

「…あ…くあ…あ…ッ！」

…大丈夫…今までだってずっと耐えてきたんだから固いベッドとざらつく布団に包まれて、じっと身を丸めて痛みが引くのを待つ

長い―これほど時間が長く感じる事が他にあるだろうかそれでも私は耐えなくてはならない私の居場所はここだけなのだから…

『―死んでいるのか？』

『―いや…まだ生きてる。虫の息だが…』

―ああ…この痛みの中にと浮かんでくるのはこの記憶だけだ崖から落とされた私はまだ生きていたらしく、とはいえ今にでも死にそうな程だったから虚ろにしか覚えていない

『おい！それを使うのか！？』

『じゃなきゃ助からない。…迷ってる暇はない』

そうして感覚のない体に、徐々に戻ってきた生きてる感覚次に目覚めた時にはもうこの体だった

始めはこの『発作』も不規則で、間隔も長く、すぐ痛みは引いていたが、最近はずぐに発作が出るようになり、痛みは確実に長く、強いもののへと変わっている

それがどういう意味かは自分が一番分かっている

―それはもちろん、崩壊だ

私はもう長くない。それは分かっている

なら、私の生まれた意味はなんだろう

それが少しもわかっていないから、私は生きている

人の命を奪いながら

第二話　く不安く

「コイツが今回のターゲットだ」

いつもの無機質な顔でそう言う白衣の男と、それが指差す画面の画像

―そこには今までとはかなり違った若く、端正な顔立ちをした男が映し出されていた

今までとは違う、というのはこれだけではない
周りを囲む作戦サポーターの数が異常に多い
それ程までに今回の任務は困難なものなのか…

一通り話し終わると、男は私を半ば睨むように視線を向ける

「作戦は以上だ。…やれるな？」

「…問題ありません」

「…では、解散しろ」

移動用の車内で、ターゲットの情報を確認する

―高岡　稔。二十一歳

一年前から我が組織への対抗グループのリーダーとして敵視を開始

(…一年前?)

以来幾度かの戦闘と暗殺を試みるが失敗
詳細は部隊が壊滅させられたため、不明
任務の難易度は特A

「…部隊が全滅…?」

この組織のことさえよく私は知らないけど、いつも編成される部隊は腕利きの者のみで構成されている
そう簡単にやられるとは思えない。ランク特Aは伊達じゃないということらしい

「…あとどれくらい？」

運転席にいるドライバーに語りかける

「え！？あ、ああ：あと三十分ぐらいです」

酷く慌てた感じでこたえるドライバーにハツとする
今まで移動中の車内で話しかけたことなんてなかった
ましてや時間を気にしたことなど：

「…そう…」

自分の中に生まれたこの焦りにも似た不安感

…恐怖？

（…馬鹿な）

怖がるなんて人間じゃなくなった時に捨てた
今の私に許されるのは命令に従って殺すことだけ
余計な感情なんていらない
…はずなんだ

そう自分に言い聞かせ目を閉じる

なんて暗く寂しいんだろう

ああ、今更こんな気持ちになるなんて

なんて惨め、なんて愚か

近づく崩壊まで恐怖を感じるなんて思わなかった：

「到着です。作戦まで待機をお願いします」

ドライバーの声に目を開く
続々と後ろにも車がつき、メンバーが降りてくる
私も降りてメンバーを見る

「…全員、配置について」

頷き、音もなく移動するメンバーに遅れず私も移動する

―風が強く厚い雲が月を隠している

街灯はなく、辺りは目を閉じたような闇だ

知らず、あの不安感が甦る

やがて見え始めた二つのライトに私の心臓は大きく跳ねた

第三話　（敗北）

―来た：

二つのヘッドライトで闇が照らされる

黒い車体は闇に溶けつつ、闇を掻き分けるように走っていた

：車が近付く

意識を集中させ、腕を振り上げる

腕は巨大な斧状に変質し、空気を裂きながら車が通る寸前の道を穿った

―作戦開始だ

作ったクレーターに車が落ちた瞬間、部隊の銃撃が車を襲った雨のように降り注ぐ銃撃を車体は一発たりとも貫通させることはなかった。かなりのレベルの防弾処置が施されているのだろうだがタイヤは強化しようがない
破裂音と共に四つ全てが弾ける

（―よし：！）

成功を確信し、先程の腕で今度は車を破壊するべく、振り下ろした―が瞬間、中からドアが蹴り破られ二つの影が闇へと躍り出た
恐らく無人であろう車を叩き割り、二人の後に視線で追う

その刹那

「―ッ！？」

眼前に迫る銃弾

それを頬に掠めながらもギリギリで避ける

が、先程のお返しだと言わんばかりの弾幕が私を襲う

「…ええい…!」

腕を盾状に変質させてそれを防ぐ

解除して次は剣状に腕を変えて襲いかかる

「…はあああ…!」

向かい来る銃撃を叩き落としながらその狙撃者に切りかかる

(—!?)

その顔を見た瞬間、私は驚きを隠せなかった

躍り出た二つの影のうち、一人はターゲット、もう一人はボディガードの類だということは容易に予測出来た

だが、そのターゲット自身が狙撃者だということなど予測しようもなかった

加えて、そのボディガードであろうもう一人がいない

(—まさか…)

と思った時にはもう私の体は横に蹴り飛ばされていた

「—ぐっ…!」

受け身を取りながらバク転し距離を離す

—が、

「…!?!」

その広くなった視界に映ったのは血の海に積まれた部隊の死体であろう山と、目の前まで迫り来るボディガードの男の影だった

咄嗟に顔面に交差した両腕は意味をなさず、みぞおちにめり込む掌底

「…う…あ…!」

思わず悲鳴が漏れ、ダメージに背中が曲がる

そのまま突っ込んできた男に倒される

「…うつ…!」

成す術なく背中をうち、覆い被さられた瞬間、男は私に唇を重ねてきた

「…ッ…!?!」

一瞬、何が起こったのか分からず、体の動きが止まってしまう
それと同時に男の舌と甘いような、苦いような液体が口の中に入っ
て来る

恐らく毒物の類だろうが、それを気に掛ける事が出来ないくらいに
動揺してしまった

蠢く舌に絶え切れず、その液体を飲み込んでしまう

（――！！）

突如襲ってくる眠気に堪えられず、私は深い眠りへと沈んで行った

眠りに落ちて行く中、男が私の体を持ち上げるのを感じた
その後は分からないけど、不思議と恐怖は感じなかった

第四話　く光と闇とく

―誰かに、呼ばれている気がした

私はそれに答えたくて、必死になって走った

暗い闇の中、私は一人

ただあるのは自分だけでほかのモノなんてない
求めても何も手に入らず、願っても叶わない
これが私。そんな事わかってる

だけど、ホントを言うと『光』が欲しかった
一つでもいいから頼れるモノが欲しかった

…でも、もう遅い

私は死んだんだ

結局何もなく、何も残せず

奪うしか出来なかった

死んでも私はこの闇の中

何も変わらず、やっぱり、何もない

…何も―

「―あれ…?」

気付けば頬が涙で濡れていた
今まで泣いたことなんてないのに、何故か今、涙が止まらなかった
私ってなんなの？

誰がこんな人生を望むだろう
惨めで、汚くて、残酷で、苦しくて…
挙げだすときりがない程の不平等な人生
そんなトコにいきなり入れられて、私に何をしろっていうのよ

私は始めて、自分の気持ちを知った
いや、目を背けてきた事実にやっと向かい合っただけ

闇の中、私の泣きじゃくった声だけが響いていた
どれだけ泣いただろう。いくら泣いても涙は乾かず、膝を抱えてし
ゃがんだまま動かなかった
このまま闇に溶けるんじゃないかと思っていたときだった
私の左頬に、温かい、何かが触れた

左手でそれに触れると、それは上へ飛んで行った
顔を上げると頭上に光が見えた気がした
その光に誘われるまま手をのばした
何があるかなんて関係なく、ただ本能的に手をのばした

立ち上がって、背伸びして、それでも届かないような気がして、必
死になって腕をあげた
力を入れすぎて目を閉じた瞬間、指先に何かが触れ、それは私の手
を握ってきた

（―あ…）

力を抜いて上を見上げると、視界は光に覆われて、全てが飲み込まれていて…

私も光へと、溶けていった

第五話　く浮き世く

「―起きたか…」

意識の覚醒と共に、そんな声を聞いた
重い体とぼやけた意識と視界
それらをなんとか動かし、声の主を見る

そこには一人の男がいた

何の経緯か私はベッドの上にいて、その隣りで椅子に座っている
顔は若かった

若いというより、まだ少年とも呼べるかもしれない

無表情を顔に張り付けたように、表情からはなにもうかがえない
歳でいえばちょうど私ぐらいかとも思ったが、そもそも自分の歳を
正確に知らない私が言う事ではない
今ある記憶の中に、これ程若い人間はいなかったからか、随分浮き
世離れしたように感じた

一度声を出したきり、彼はじっと黙っている

私もまた、言葉もなくただ黙る

が、沈黙を破ったのは私の言葉だった

「…ここは…」

酷く掠れた声

男は一瞬、眉を動かしたがすぐに無表情に戻る

「地獄という訳じゃないのね…」

自嘲的な笑みがこぼれる

同時に、頬を涙が濡らした

「…バカみたい…」

次第に震える声

男はただ、何も言わず私を見ていた

「…生きてて…っ…嬉しいなんて…」

震えは嗚咽に変わる

私はなす術もなく泣きじゃくった

―何て、惨め

許されない過去も、血で汚れた手も、全部忘れて
生きている事を、喜んでしまった

続く嗚咽に割り込むように、男が口を開いた

「…誰でも…」

言って、椅子から立ち上がる

「…死は恐れるものだ」

私の真隣りに立ち、続ける

「…生きていること。死んでいくこと。それがどういうコトか分かっただろう」

私を見下ろす。その顔に表情はない

「…言われるままに奪ったモノ。それがどれだけのコトだったかを」
真っ黒な瞳。私は目を背けられない

「…故に許されない。君の過去は」

伸びてくる手。体は動かない

恐怖、いや罪の意識の痛みに体が震えた

今度こそ罰は逃れられない

意識の端に、そんな言葉が浮かんだ
頭に手が置かれる

「…ッ！」

死ぬ―

その実感が目を強く閉じさせた

―が

「…？」

手は私の髪を撫でただけだった

「…君はここで死んだ」

男の声に、ゆっくりと目を開ける

そこには不器用な笑顔を浮かべた彼がいた

「…よろしく夏夜。君は新しい人生を歩むコトになる」

「…え…？」

開いていた窓から風が入る

それが私の問掛けをかき消したかの如く、彼は部屋を後にした

第六話　私の望み

―パタン…

彼は部屋を出た

部屋に静寂だけが残る

「…」

訳が、わからない

私に変われど、彼はそう言った

元々私に選択する権力などない。願ってもいけないと

―そう、思っていたのだ

―ガチャ

「…?」

ドアが開き、また誰かが入ってくる

薄い茶髪にフレームレスの知的な眼鏡をかけた―

「…高岡…稔」

肯定したように、彼は薄く笑った

彼が此処にいるということは、先程の彼は襲撃時に私を倒した『あの人』だということになる

「彼とは話したかな?」

雰囲気通りの声色で話しかけてくる

そこに、自分を襲った事に対する非難の色はない

「彼の名前、わかるかい?」

反応しない私にさらに質問をしてくる

私は、重い口を開いた

「…どうして?」

「うん?」

見当違いの返答に、彼は聞き返す

「…私は貴方を殺そうとした。今も貴方に危害を加えようとしてるとは考えないの？」彼を冷たく見ながら、坦々と話した

それは本当の話

私の存在は決められた相手を殺すことだけ

なのに、彼は

「思わないね」

飄々とした態度を変えず、そう言った

「君に僕を殺す理由がないし、そして殺したいとも思っていないよ
うだからね」

相変わらずの薄い笑み

私は反発するように言った

「…理由…なら、ある。それが私なの。貴方を殺すコトが、その行為自体が私。それしかないもの。それしか知らないの。…だから」

自分に言い聞かせるような言葉

私はベッドを降りて彼を見た

「…貴方を殺します」

キン、と右腕が高く鳴る

体が重い。意識が朦朧とする。いきなりの無茶に体が動けないと悲鳴を上げる

ふらつきながら近づく

彼は動かない

張り付いたような薄い笑みは今ほまるでお前には出来ないと言っているようだった

『生きていくこと。死んでいくこと。それがどういことかわかったらう』

彼の言葉が浮かぶ

そんなことは知らない。…知らない

『故に許されない。君の過去は』
そんなことは言われなくても分かってる。…分かってる

―でも、でもね？

過去は消せないの。罪は消えないの
だから―

「―！」

考えて、気付いた
だから、罪を重ねるしかなかった？
そんなの…間違ってるよ。私

足が止まる。同時に膝が震える
前に、進めない

彼はやはり、動かない
そして、肩をすくめ、言った

「殺らないのかい？」

スイッチが入った様に、私は

彼へ飛んだ

普通の人間には出せない瞬発力で、文字通り消えるように間合いを
詰める

右腕の刃は、無防備の彼の心臓に吸い込まれていく

その光景を、小さなワタシは酷くゆっくりな世界で、他の所から見
てた

『ねえ。私って何がいけなかったのかな？』

小さなワタシはゆっくりな世界で尋ねてくる

―さあ。…強いて言うなら生まれて来たことじゃない？

『そっか。…でもそんなこと言ってたてしょうがないよ？』

―でも事実。逃れられない運命の様なみたいなモノよ

『ホントに？』

―？

『じゃあ、何で生きたいと思ったの？』

―それ…は…

『いい加減認めようよ』

―何を？

『もう、分かってるでしょ？』

そう言って、姿を消した

私は…ワタシは…

『よろしく夏夜。君は生まれ変わる』

体が、止まった―

「…私…」

膝が崩れて、その場にへたりこむ

その横に、いつの間にか最初の少年が立っていることに気付く
私は彼の服を掴んで、言った

「…生きてていい、って…言ってほしい」

それが私の、恐らく最初の望み

彼は、やっぱり頭を撫でて

「―生きてて、いいよ」

って、簡単に言った

第七話　（普通な事）

気が付くと、またベッドの上にいた
昨日そういえばあの後の記憶がない

あのまま寝てしまって、朝になったという訳らしい

「…良く寝れたか？」

「…！！！」

突然の横からの声に、ビクリして上半身が飛び上がる
そこには、あの少年がベッドを背に座っていた

「…少しは良くなったか？」

この位置からでは顔は見えないが、苦笑しているようだ

「…あ、あの」

話し掛ける

普通の会話なんてしたことなどあるわけもなく、しかも自分から話す機会などもっての他だったから、かなりぎこちなかっただろう

「…ん？」

「…き、昨日の事なんですけど…その…」

彼は背を向けながら、聞いてくれている

「…ごめんなさい」

「別に謝るような事じゃない」

彼は立ちながら言う

「…誰も怪我もしてない。稔も同じ事を言うだろう。むしろお前の事を心配してた」

振り替えるとやはり無表情が張られたような顔があった

「…さて、くだらない話は止めて。下に来てくれ。みんなが待ってる」

くだらない、で済む話ではないはずだが、そこは問題ではないらしい
「…立てる？」

再び背を向けようとした彼が、肩越しに聞いてくる私は頷いて、ベッドから降りた

―が、

「―あれ…?」

力が抜けて、膝をついた

おかしい。体が変わ

思うように、動いてくれない

―と、体が浮かされる

「…あ…」

軽々と持ち上げられ、彼を支えにしてようやく立つ

「…ご、ごめんなさい」

「…いや、これは…」

言って言葉を濁す

「むしろ俺のせいだ。すまない」

「…?」

そのまま手を引いて歩いていった

ふらつく私に合わせながら

階段を降りると、大きなテーブルと、それを囲むたくさんの子供、

そしてその中心に高岡稔と若い女性がいた

飲んでいたコーヒ―を置き、また薄く笑う

「遅かったね。体は大丈夫かい?」

慌てて頷く

やはり少年の言う通り私の心配をしてきた

「…あの」さっきはああ言われたが、やはり謝っておきたい

そう思って声を上げたが、下から服を引っ張られ、それも止まる

下を見ると、席を離れたのか、男の子が一人いた

ぶっきらぼうな表情でじっと、私の目を見つめている

何故だろう。私はこの子を知っている気がする

「…ほら、拓己。お前も座れ」

彼はその子の背中を押し、席に座らせた

「…夏夜も、座って」

「…え？」

連れてこられたという事からまさかとは思ったが、とんでもない事に、私を客人の様に扱おうとしている

私を何だと思っているのか

貴方達を殺そうとしたモノだと言うのに

「…別に気にする事でもないだろう」

私の心情を読んだかのように、彼が言う

「…コイツ等は君がどんな人か知らないし知っても分からないさ」
言いながら、無理矢理椅子へと座らされる

「では、いただきますようか」

稔の音が響くと、子供達も続いて挨拶をして食べ始めた
場が一気に騒々しくなる

「…」

居場所がなく、私はブーツとするとしていると、コツン、と頭を隣からスプーンで叩かれる

スプーンを捨て、パンを一つ渡しながら言う

「…食いな？」

それを受け取り、戸惑いながら私はそれを口に含んだ

「…おいしい…」

思わず口に出した

「…食事なんて、久しぶりです」

「…そうなのか」

左手をだらんと下げて、行儀悪く食べながら、彼は答えた

「…普通より、食べなくても生きてられますから」
言って、痛感した

私ってやっぱり、人間じゃあないんだな、って

少し暗くなった私に、彼はまた私の頭を撫でて、言った

「…良かったな」

「…え？」

「…普通より飯が美味く食えたじゃないか」

冗談なのか、本気なのか

軽く目の前の食べ物をたいらげた彼は、椅子にもたれた

「…そうですね」

そんな考え方ができる彼が、眩しかった

眩しくて、涙が出るくらい

賑やかな食卓の中、誰にも気付かれず、私は泣きながら笑った

第八話　　（決意）

「酷い切り方ねえ。これじゃ綺麗な髪が勿体無いよ」

「…」

「後でちゃんと揃えなきゃね。次は逃げないでね？」

―響くシャワーの音。泡立つ頭。火照る体

彼女の部屋のバスルームの中、私は溜め息をつく暇も無かった

何の因果か稔の妻だという女性に、食事後即刻風呂に入れられた

初対面のハズだが…彼女にそんなことは関係ないらしい

当然、抵抗はした

が、彼女の独特の流れに何故か強制的にこういう事になってしまった

「これじゃ啓介君に失礼よく。アの子あなたの髪が大好きみたいだから」

なんて一方的な会話が続く

が、今回だけは反応した

「…彼の名前、啓介っていうんですか？」

初耳だった

「あらら。あの子も馬鹿ね。記憶消されてるのに。覚えてる訳ない

じゃない」

「…え？」

「ううん。こっちの話。そう、彼は啓介っていうの。スオウジケイスケ朱凰寺啓介。気になる？」

「…朱凰寺、啓介…」

声に出してみる。何故だか、妙な違和感がそこにはあった

その疑問を振り払う様に、言った

「…貴女の名前は？」

タカオカトモエ
「私？ 高岡巴」

「…では、巴さん。彼は、啓介さんは何故私を助けたんでしょうか。…それに貴女も、稔さんも。何故私を許したんですか？ 私は貴女の

夫を、殺そうとしたんですよ」

知らない筈はない。知らなかったとしても知ってほしい
私がどんなモノで、どれ程許されないコトをしたモノかを
不意に、頭にかかるシャワーが離れた

「ここはね、孤児院でもなんでもないんだ」

そして明瞭になった聴覚を感じ取ったのは、見当違いの言葉だった
「なのにココにこんなに子供がいるのは、何故だと思う？」

彼女は手を伸ばして、シャワーを止める

「あの子達はね？あなたが始末してきたターゲット達の子供なの」
シーンとしたバスルームに、その声は嫌に響いた
心臓が、高鳴った

朝、服を引っ張ったあの子に見覚えがあったのは…

「…そんな…こと…」

火照った体が、急速に冷えていく
突きつけられた現実には、押し潰されそうになった

「―それでも」

そんな私に、彼女は優しく言った

「それでも私達はあなたを許す。理由なんて人それぞれ。罪を犯し
ていない人なんていない。それが大きい小さいかだけ。なら私は
両方許したい」

「…」

「ただそれだけよ。泣き虫夏夜ちゃん」

言って、ハサミを取り出して髪の手を切り始めた

ホント、私って泣き虫だ

泣きじゃくった声が響く

彼女は、何も言わなかった

いっぱいありがとう

いっぱいのごめんなさい

私、きっと変わります

私のくだらない命を、きっと輝かせてみせる
だから：

もうちょっと、泣かせてください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5892b/>

Diamond Piece

2010年10月28日07時23分発行